

京都大学  
1969年ブータン学術調査隊  
帰国報告書



京都大学ブータン研究会

## 帰国のごあいさつ

1969年京都大学ブータン学術調査隊に対しまして格別のご理解とご援助を賜わり、厚くお礼申し上げます。

私たちは昨年8月国内における準備を終え、ブータン王国へ向け出発いたしました。同国入国のためにインド政府よりインド国内北方地域通過の許可を得なければなりません。この許可の取得に長期間の困難な交渉を余儀なくされましたが、ブータン国王、王妃両陛下の並々ならぬお力添えの結果、9月下旬待望のブータン入国を果たしました。そしてブータン西端の町ハから東端の町タシガンまでの調査旅行を含め、8週間、同国に滞在し本年2月までに全員無事帰国いたしました。この間、一般に知られていないブータン王国の風土、生活、文化等の実態について知るとともに、種々の学術的資料を収集することができました。私たち隊員一同この調査が有意義なものであったと自負いたしております。

ブータン王国は伝統ある独自の文化を保持しつつも、国土の開発、近代化、国際社会への参加等を目標にして種々の努力を重ねております。例えば、教育、道路建設事業、農業育成に関する重大的な政策、万国郵便連盟への加盟、国連参加への努力などがあげられます。しかしながら教育一つをとりましても、教材の不足、教員の質の向上などまだまだ幾多の問題があるのが現状です。このような国の発展のためにかたよらない立場から、協力するのは、アジアの先進国たる日本の役割ではなからうかと強く感じました。

私たちはこの隊の成果を踏台として今後より一層の学術的成果をあげるとともに、ブータン王国との親善と理解を深めていくことを目指しております。

今後ともよろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。

京都大学ブータン学術調査隊総裁  
日本学術会議副会長

桑原武夫

京都大学ブータン学術調査隊隊長  
京都大学工学部助教授

松尾稔



## 行動概要

灼熱のインドでは、松尾稔隊長以下6名の調査隊の、ブータン入国許可書の取得が予想外に難行した。一足さきに桑原武夫総裁、笹谷哲也隊員の許可は別個に下り、2名は9月下旬に1週間にわたってブータンに滞在が許された。この間、国王陛下、王妃陛下に謁見を賜ったのを初め、政府要人と会見し、ブータン国内のおおまかな事情を知るとともに本隊の早期ブータン入国についての援助をお願いする機会を持った。

この甲斐あって、約1ヶ月後の10月の末、待望の6名のブータン入国が実現したのである。調査隊はかなりの期間にわたってパロに滞在し、パロゾン（リンブン・ゾン）、唯一の日本人西岡京治氏の経営する西岡農場、学校、寺院などを訪れ、又、農業、気象、地理などに関する調査を行った。この間首都ティンプーへ行き、国王陛下、政府要人にお会するとともに、ティンプーの宮殿、学校、農業試験場、最古のゾンであるシムトカ・ゾンなども訪れた。その後、西方のハの町へ小旅行をし、その途中幸運にもブータン・ヒマラヤの盟主チョモラリ(7,314m)を望むことができた。さらにパロにおいて王妃陛下の特別のお裁いで、1年にわずかしかなわれない雄壮なマスク・ダンスを催していただき、貴重な民族学的資料を得ることができた。

我々の隊が、国王陛下の特別のご配慮を賜わり、東ブータンの一大都市タシガンへの調査旅行をすることができたのは、この上ない喜びである。一部ジープとトラックを使用し、プナカを訪れた後、馬と徒歩でタシガンまでの旅行をした。ペレ・ラ

(峠)を越え、数日で中央ブータンの町トンサに到着した。ここは現国王陛下の誕生の地でもある。さらに桃源境を思わせるゲチャの村。美しいビヤガール・ゾン。ブータンの中ではめづらしく集村を成しているウラ。我々に対してこの上なく好意を示してくれたゾンダ(県知事)がいたモンガル。そして目的の東端の町タシガン。旅程の関係でかなり急ぎの旅ではあったが、峠を越えるたびに移り変わる植物相や言語・風俗は、我々の限りない知的好奇心をかきたてた。途中、ワタン・ラからブータンヒマラヤの幻の最高峰ガンケルプンツム(7,550m)やクーラ・カンリ(7,554m)が遠望できたのは、この上ない喜びであった。

パロに帰り着き、虎の巣という名の寺院タクサンガも訪れた後、王妃陛下や西岡京治ご夫妻に感謝とお別れのご挨拶をすませ、なごりおしいブータンを後にし、2月には全員帰国した。

旅行を通じて、米、麦、トウモロコシ、その他の穀類、土壌、岩石、ラン、シャクナゲの種子、昆虫、淡水産植物、草本植物、苔類、流水などのサンプル・標本を多数採集することができた。また、行政、税制、教育制度、医療施設、政治機構、開発計画、そして、風俗、習慣、宗教、言語、民謡、食生活などについても各種の資料を収集した。学校、農業試験場なども多く訪問する機会にめぐまれた。この間フィルムを約200本撮影して、風景・風俗写真のほか、絵画・経文・書籍・記録の接写、農業、建築、土木、地形、地質、植物、昆虫、民俗などの貴重な記録写真を持ち帰ることができた。

以上の標本や資料は今後大学での研究・検討の上、逐次発表される予定である。



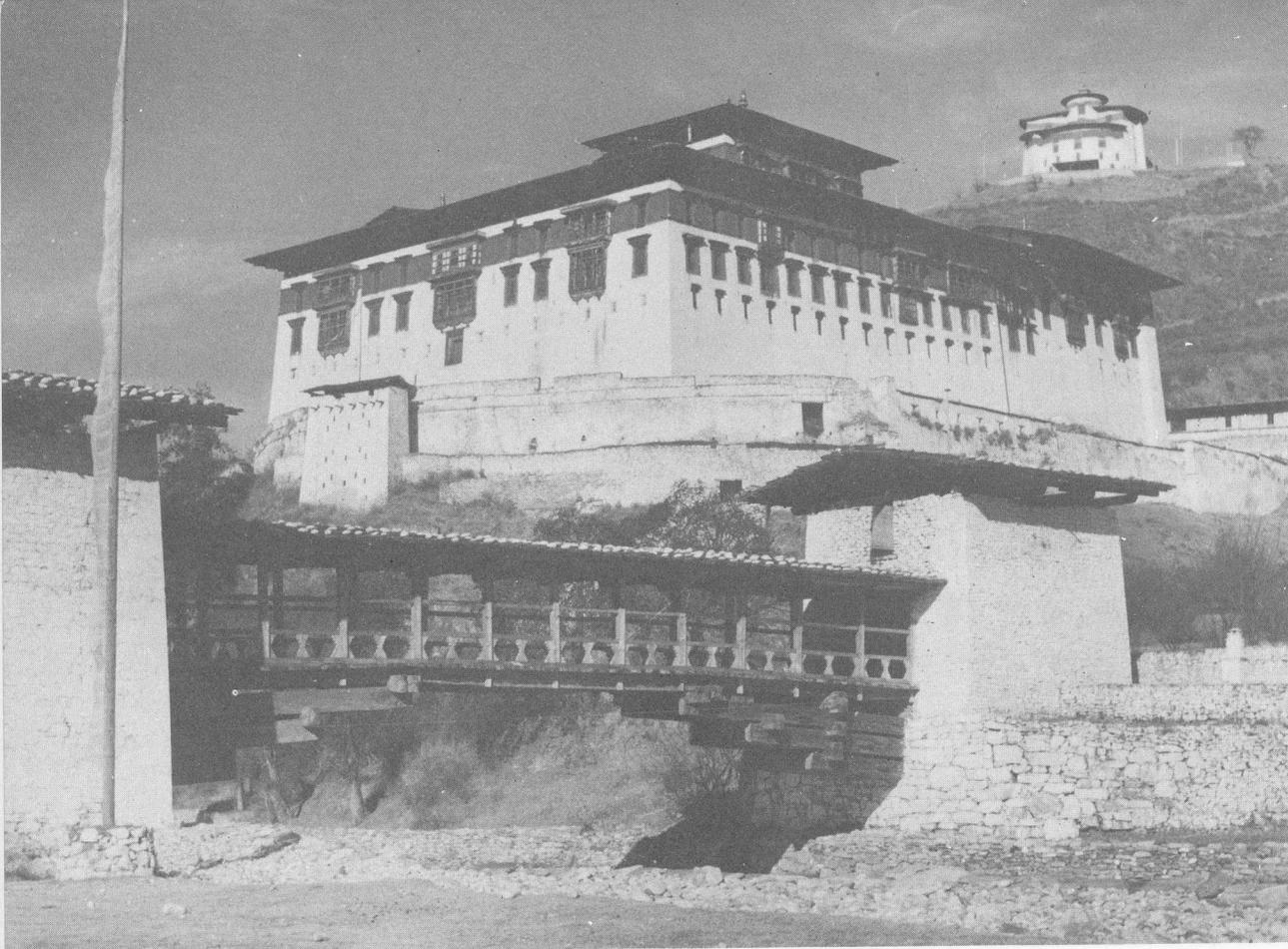


## 隊員構成

総裁	桑原武夫 (65)	日本学術会議副会長 京都大学名誉教授
隊長	松尾稔 (33)	京都大学工学部助教授
副隊長	吉野熙道 (29)	京都大学農学部卒業生
隊員	笹谷哲也 (32)	京都大学経済学部卒業生
	松田隆雄 (28)	京都大学大学院農学研究科学生
	山本清司 (23)	京都大学理学部学生
	米本昌平 (23)	京都大学理学部学生
	田中達吉 (22)	京都大学理学部学生

## 会計報告

収入	隊員負担	1,366,000
	一般寄付	7,479,000
	雑収入	2,760
	計	8,847,760
支出	国外交通費	2,318,800
	食糧費	730,660
	装備費	1,386,400
	現地滞在費	835,950
	国外運送費	518,130
	学術調査費	1,349,290
	医療費	482,060
	国内事務雑費	491,060
	保険通関費	273,610
	フィルム・現像費	281,800
	文書発行費	180,000
	計	8,847,760



## 朝日新聞より

2月20日夕刊

ブータンとの因縁は古い。1957年の晩秋、同国王妃が京都滞在中とのニュースをつかんだ私たちは、非礼を顧みず電話で会見を申入れ、快諾をえた。ホテルのロビーで待っていると、こつ然として華麗なチベット服をまとった窈窕（ようちょう）たる美女が老婦人とともに現れた。ケサン・ワンチュック殿下とその母君であった。これが機縁となって中尾佐助君（大阪府立大教授）が翌年植物採集に単身入国した始末は、同君の『秘境ブータン』にくわしい。

それから12年、京大の若い連中がなお鎖国をつづけるこの国の学術調査と山をねらって計画立案中、まさに天の恵みというべきか、王妃が王女たちを伴って昨年2月来日された。おりから京大は紛争の最中で、私が接待委員長をつとめたが、そのご滞在中、松尾稔助教授が熱誠をこめて、ブータンの自主的近代化のためにはまず綿密な学術調査が必要であること、私たちは単に好奇心や冒険心の満足のためののぞきに行こうというのではなく、植物地理学的にいえばともに日華区系に属するように、国民の体格、容貌（ようぼう）もまったく似ているこの兄弟国の発展をこそ望んでいるのだと力説した。王妃は深い共感を示された。

調査隊は3カ月滞在中の松尾隊長以下6人、ほかに総裁として桑原が加わるが、私は3週間の短期滞在中とした。4月になって王妃直筆の招待状と同国政府の入国許可状が届いた。しかし、ブータンはインドとの間に、外交に関してはインド政府のアドバイスに従うという条約を結んでおり、これにもとづいて、中印紛争以来きわめて神経過敏になっているインドは、ブータンへなるだけ外国人を入れないように配慮している。

インド側の許可状がなければ入国できないのだが、その申請は8週間前にせねばならぬという規則がある。私たちも用心して8月早々に先発隊を出し、本隊は9月中旬出発した。

ひまのかかる外交折衝の詳細は読者には退屈であろう。駐印日本大使館の尽力にもかかわらず、結局本隊6人は拒否され、わずかに私ほか1人の観光1週間が認められただけであった。この上は、2人が急いで入国、王室の力にすぎり逆転をはかる以外はない。

9月29日午前4時半、カルカッタ空港からDC3に乗りこんだ。新聞を主とする貨物のすきまにやっと座席を見つけたのは、私たちのほかにブータンの役人1人、茶園関係の英人2、3にすぎなかった。バトパラの飛行場にはブータン政府差回しのジープが来ていた。1日のうちにブータン中央部のパロまで飛ばそうというのである。

国境を越すと、ただちに1,000mくらい駆け上る。2,000mほどの山腹をからむようにして道路は走っている。このインド・ブータン道路の開通が、この秘境をいやおうなしに近代化の道に引きずりこんでしまったのだ。

1958年、ネール首相が突如ブータンを訪問し、自動車道路の開設をつよくすすめた。ブータン側は拒否したものの、2年後にはのまねばならなくなり、また中印紛争でその重要性が明白になるにつれ、インドは設計と造成費を負担し、ブータンは全国民に1年に2カ月の夫役を課するという強引な方法をとることによって開通せしめたのである。

強制か否かは問わず、できてみれば、これほど便利なものはない。11年前、中尾君が山ビルに悩まされながら8日間をかけて辿(たど)りついた行程を、私たちのジープは6時間半で飛ばしたのである。ブータンの自給自足性は鎖国を可能としてきた。しかし、一たんジープにのれば、もう捨てることはできず、車を走らせるには外貨をもってガソリンを買わねばならない。ガソリンは一例にすぎない。結婚ではまだ妻問い婚の形式が支配的なこの古風な国も、外貨獲得の方策を考えねばためどころへ追いつめられつつある。

ジープがカーブを一つ切ると、濶然(かつぜん)として開けたパロの谷は、そうした理屈を一度に忘れさせてしまうほど美しかった。イネが豊かにみのり、蔬菜(そさい)は青々と育ち、清流のそばには4層の離宮があり、そこから見上げる斜面には巨大な白いゾン(城)と、これを守るいくつかの望楼(ぼうろう)とが緑に映(は)えている。標高2,700m。

この国は今から100年ほど前までは、祭政一致的にラマが支配していた。その宗教的、軍事的、政治的中心が、ブータン各地にあるゾンなのである。

現王室ワンチュック家が国内を統一してから、まだ3代しかたっていない。現国王は国務に熱心で、政府には開発、内務、大蔵、商工の4大臣をおいているが、開発省が中心にあり、外務も教育もその所管となっている。この省にはインドからの援助がかなりあるように推察された。しかし、それぞれの省の次官クラスは、国王が国内の秀才を選抜して、インドなどで勉強させたおよそ20代の青年で、その2、3は私も接触したが、自主興国の熱意は、明治維新当時の日本の官僚に劣るものではないと思った。国民議会も年2回開かれる。

私たちはジープを走らせてチョモ・ラリ(7,314m)を遠望し、神秘的なゾンの内部を見学し、またここに5年とどまって農業指導にあたり、国内の信望第一といわれる西岡京治氏夫妻の農場を見学したあと、首都ティンブーに移った。ここはゾンで古来の礼法に従い、白い絹布を両手にささげて国王の謁見(えっけん)室に入ると、気軽にいきなり飛出してきた人がある。侍従かと思ったら国王ご自身であった。打ちとけて話をして下さったので、拒否された6人が必ず入国できるよう懇願したが、これがやがて実を結ぶことになった。

ブータンは漸進的に主体性を増大しようと考えているように見える。最近、万国郵便連合に加盟したが、これは独立国であることを全世界に認めさせたのである。さらにネール首相が訪問のさい、10年後には国連に加盟さ

せよう、といったことばをみな覚えていて、早く実現したいと願っている。公平な立場から、日本こそその加盟を支持すべきであろう。

こんな政治的な話ではなく、美しい自然、質朴勇健な人情、とくに王妃が私たちのために開いて下さった送別会の盛況などをこそ私は描くべきであったのかも知れない。ただここでは、王妃が大蔵、内務の両大臣を伴って私を訪問されたさいの一挿話(そうわ)を記すにとどめよう。王妃は美しい芝生の灌木(かんぼく)の木陰に腰をおろされた。私と大臣がその横にすわる。なに一つ命令されないのに、王妃のうしろにははずぐ巨大な日傘(ひがさ)がさしかけられたのには驚かなかったが、私と大臣の背中にさす暑い日ざしも、どこから切ってきたのか、こぼしほどの太さの柳の枝を3、4本、たちまち芝生に植えこむことによって快くさえぎられた。国王や王妃につかえているのは、近代的な使用人でもなく、封建的な家来でもない。どこか古代風な、身も心もささげつくした温和で勇敢な人々である。私がふと散歩に出ると、そういう従者が、紅茶、菓子、ウイスキーを虎(とら)の皮の敷物とともにバスケットに入れて背負っているのであった。(桑原武夫記)



### 3月2日夕刊

ブータン入国の困難さによく知っているつもりでいたが、今回の京都大学学術調査隊は、王妃のご招待であるからと、やや楽観していたのがいけなかった。ビシヤリと断られた。かろうじて入国出来た桑原武夫総裁からの吉報を、私は5人の隊員をかかえた隊長として、炎熱のインドで、毎日いらいらしながら待っていた。

桑原総裁が出国して2週間後に、ようやく6名の入国許可証がインド政府から交付された。

ブータンは永い間、「なぞの王国」として、外界との交渉を絶っていた。この九州よりもやや大きい王国には、福井県とほぼ等しい75万人の人々が住んでいる。正確には、目下国勢調査を行なっているという。

ブータン国は、チベットとの間を区切る7,000mのヒマラヤ山脈からベンガル平原へと続く南斜面の山国である。文化の中心パロ、首都ティンブー、かつての首都プナカ、地方都市のハ、トンサ、ブムタン、タシガンは、ほぼブータンの中央部に東西の一直線上に並んでいる。これらの町は、北から南に流れる川にそった谷間に発達している。われわれは、国王の特別のご配慮のもとに、東の端の町タシガンまでの調査旅行を許された。このようなことは外国人にとっては全くの特例であった。ジープを使えたのは一部で、後は馬と徒歩の旅である。隣の町に行くのにも、ヒマラヤの枝尾根を、2,000mほど、登り下りしなければならないから大変だ。



野生のパナナが茂り、強い日ざしが降りそそぐ低地の村を出発すると、道は急な登りになる。私の前を健康そうな女が、「シチョー!」「ツオンジャ!」とかけ声をかけながら、荷馬を追って登って行く。登りつめた峠からは、急に視界が開けて、真白なヒマラヤが一望できる。モミヤツガの枝には残雪があり、夏景色の村落からたちまち冬の様相となるのだ。

旅に出て驚いた。どこで会うブータン人も、顔や体格が日本人とそっくりだ。男は日本の丹前(たんぜん)や厚子(あつし)に似た着物を着ている。そして、ゆったりとふくらませたふところには、かみタバコに似たドマ、手ぬぐいはよいとしても、竹で編んだ弁当箱や、湯のみ茶わんや刃渡りが40~50cmもある短剣まで入れている。見た目には、何ともいえず奇妙であるが、本人には、この上もなく便利なことだろう。

すれ違う旅人が、気軽に土地の言葉で話しかけてくる。ブータン風の帽子でもかぶっていると、もう弁解の余地はない。話しかけた方が、最後まで日本人とわからずに、ケゲンそうに首をかしげて行ってしまった。この国の女性が一番恥ずかしがるのは、人にヒザを見られることである。もちろん、彼女たちの着物は足もとまでである。ふところに大きなふくらみをつけて、一切合切を詰めこんでいるのは、男と同じだ。布地は立派な手織りの木綿地で、外出着はあざやかな色で模様が織込まれている。

ブータンの町は、日本では村というほうが適切だろう。川のそばや、山の中腹に家が建っている。構造は一階が牛馬や豚などの家畜用で、居間や台所、便所は二階、三階にある。おのおのには立派な仏壇があって、ブータン人の信心深さを示している。基礎は、石、壁には粘土、

床や柱は木材を用いている。屋根は板ぶきで、その上に石を置いている。部屋の窓には、ガラスの代りに、竹で編んだスタレがはめ込んである。外観は実に立派なものである。

ブータン人は仏教徒であるが、ヒンズー教徒のインド人が牛を食べないのに比べて、彼れらは、牛肉や豚肉を好んで食べる。ジャガイモ、カブラ、タマネギとヤクの肉や豚肉をブツ切りにする。それをナベに入れ、塩と香辛料とトウガラシをたっぷり入れた煮込み料理をこしらえる。これが彼らの常食だ。なにしろブツ切のだから小骨が残る。食べる時に、この小骨で口の中を切ることがある。味はすこぶる辛い、脂肪分が多く、栄養は豊かである。主食には赤米(あかまい)のご飯をたく。ナベに湯を煮たぎらせて、その中に赤米を入れる。ふきこぼれても、そのままにする。米が柔らかくなると、残った湯をザッと捨て、あとは火の側に置く。たき上がったご飯は、あずきのない赤飯のように赤い。この料理法は、ご飯をたくというデリケートなものではない。ブータン人は豆をゆでるのと同じ感覚で米をたく。

ふろは焼き石を利用する。まず川の近くの斜面に、西洋ぶろよりやや小さな穴を掘り、木のわくを組込む。ミゾを掘って川の水を引き、それに満たす。同時に大きなたき火が燃やされて、石が焼かれる。真赤になった石を、地面のふろオケに投込んで、立派なふろがわく。熱い時には、泥でせき止めてある流れの水を引込んでぬるくする。泥水なのには閉口するが、野趣豊かなものである。このふろも、そうたびたびはわかさない。種まきのとき、収穫のときにかぎり、村のあちこちで煙がのぼる。

ブータン人の生活は、インド人の生活と比べるとはるかに豊かで素朴である。このような衣食住の豊かさの結果とも思われるが、ブータン人は、礼節や恩義を重んじる。特に正式の場や人前での、秩序を無視した態度はきらわれる。物質文明が人間の生活を侵すようなこともなく、かれらには、釣りや弓や舞踊を楽しむ精神的なゆとりがある。とくに、弓は国技であり、冬のシーズンには、大勢の人々が弓の試合を楽しんでいる。老人も子供も手をたたき、ダンスをして応援する。

100mも向うから放たれた矢が、小さな的に当たると大変だ。歓声を上げるもの、踊りだすもの、陽気なことである。惜しいところではずれると、頭をたたき、しゃがみこんでくやしがる。朝早くから、弁当特参の試合は夕暮れまで続く。しかもそれが、3日、4日と続くのである。

(松尾 稔記)





### 3月3日夕刊

ブータンは、国王の強力な指導のもとに、少しずつではあるが近代化を進めている。この国の総合開発計画は、1961年からの第1次5カ年計画がすでに終り、現在は第2次計画の途中である。主要な政策は、教育と公共土木事業であり、農業開発がこれに続く。

教育に対する力の入れ方は大変なものがある。現在国中で小学が126校、中学校100校、高等学校が4校、さらに工業専門学校、農業研修所、教員養成所が開設されている。一般教育は、かつてはヒンズー語で行われていた。これを英語に切りかえたのは国王の強い希望によってであった。勉強に対する子供たちの熱心さ、知識欲、それに行儀の良さには目をみはるものがあった。

旅行中、私はしばしば学校を訪れ、子供達と話合った。かれらは物おじしない態度で、いろんなことを私に質問した。「日本が現在のように豊かな国になったのはなぜか？」という問いは、どこの子供たちでも真先にする質問の一つだった。この子供たちが、将来のブータンの発展に大きな力となることは疑いない。ただ教科書、ノートなどの教材の不足、教員の養成や質の向上には、まだまだ悩みがあるようだ。

国土開発で特に目をひくのは自動車道路の建設である。インドから通じる3本の南北線とハからウォンデポタンを結ぶ東西道路がすでに出来上がっている。1976年に第3次5カ年計画が終ればタシガンまでの中央幹線道路のすべてが完成するだろう。その総延長は約900kmで、うち600kmが現在舗装されている。すべて2車線で思っ

いたよりも立派なものだった。主要な町間の交通を確保する道路建設は、ブータン近代化のための急務だろう。いずれにしてもここ数年の間に、輸送その他に大変革がもたらされることは明らかである。

ブータンは1昨年、政府に省制度を設け、教育、道路、農林その他を総括する開発省とその他に大蔵省、内務省、商工省を置いた。各部門から出てくる計画は、5月と10月に開かれる国会に提出され、審議されて実施に移される。国会議員は150人で、任期は3年、議員になるのに男女、年齢などの制限はない。ただし今のところ女性議員はいない。

議会内では、国王も一般議員もすべて平等である。議員の選出は非常に民主的に行われており、120人が一般国民から選ばれる。選挙区は村の次に大きい「ツォー」と呼ばれる行政区画で、村びと全員で議論し議員を指名する。この場合、女性の発言力が非常に強いということだ。

残りの議席のうち、20人は国王の指名により、また10人はプナカにある僧侶(そうりょ)の会から選出される。この国の僧侶は、きびしい求道的な生活をしており、知識人としての社会的地位も高く、国民の厚い信頼を受けている。また同時に僧侶は、人々のよき相談相手でもある。市場で気軽に買物をしたり、日だまりで、村人たちと話しこんだりしているのをよく見かけた。どこの寺院でも、朝早くから、朱色の衣を着た子供の僧が、大きな声でお経を読んでいる。宗教が民衆と深く結びついて精神的支柱をなしている姿には、深く感銘させられた。

